つぶやきがんちゃんの

生活知恵袋

生活に何かと役立つ連載コラム

Vol. 176

齋藤 廣勝
（さいとう ひろかつ）
株式会社トータルライフサポート
代表取締役

・CFP®サーティファイドファイナンシャルプランナー
・1級ファイナンシャルプランニング技能士
・日本商工会議所　年金・退職金等認定講師
・住宅ローンアドバイザー
・金融広報アドバイザー

今月のテーマ

保険種類とそれぞれの活用方法（死亡編）

“死亡保障を主な目的とした保険”と一口に言っても、一体どれだけの種類があるのか、数えてみようとも思ったがあまりの多さに気持ちが折れてしまった。それというのも、単に死亡保障というくくりだけであればそれ程でもないが、それだけでは説明しきれない部分があまりにも多い。タイトルに「それぞれの活用方法」とは入れたものの、この「それぞれ」がくせ者なのである。

この「それぞれ」の全てを説明しようものなら、時間がいくらあっても足りないし、現実的ではない。私でさえそう思うのに、一般消費者はどう選べば良いのだろうか…!?そもそも、多くの種類の中から一つを抜き出すために、全ての保険種類を調べあげて、理解した上で選択する…。もしそれが出来るなら素晴らしいことではあるが無理としか言いようがない…。保険種類も然ることながら、保険会社も2023年6月現在で42社もあるのだから…。

自分で出来ない以上は「誰か」に依存するしかないが、この誰かが重要となってくる。今どきは、様々なメディアを通じて、これまた様々な情報が飛び交っている。その中身を見ると、一面的な見方での思い込みとも思えるような断定的な発信も少なくない。これらにより、ますますややこしくなっている気がする。話しは脱線するが、私は“通”とは言えないまでもワイン愛好者の一人である。ワイン業界には「ワインソムリエ」なる方が存在し、野菜には「野菜ソムリエ」が存在する。これらプロフェッショナルが凄いのは、単にワインそのもの、野菜そのものを知るだけではない。飲まれる方の好みは勿論、食事の内容に合うのがどの地方のどのワインであるかも熟知しているのがプロたるゆえんである。保険からワインにこじつけてしまったが、ワインに限らず多くの物事に当てはまることだと思う。単に、保険だけを知っているだけに止まらず、それぞれの家庭の事情も含めたプロフェッショナルなパートナーを持つことをお勧めしたい。

死亡保障の3つの基本形と収入保障保険

最終的な判断は、プロフェッショナルのアドバイスを受けることをお勧めするものの、最低限の仕組みは知っておきたいものだ。生命保険は、上手に使うと人生の強い味方になってくれる。上手に使うとはよくわかった上で使うことであり、逆にそこが欠落してしまうと損をすることにもなりかねない。よく耳にするのは、「よくわからないけど、入っていないと不安だから」と、安易な契約をしてしまっているというケースだ。生命保険は、生きていくうえで万一に備えるとても便利なツールである。ある意味では家を建てるときの土台にも似ており、重要なアイテムなのである。そして、自分の暮らしに合わせた保険であることは勿論で、かつなるべく安い価格で手に入れたいものだ。皆さんは、同種の保険であっても、その保険料は保険会社によっては驚く程の違いがあることをご存じだろうか…。また、保険料だけで判断することも注意しなければならない。安く加入できたと思いきや、実は「保障の内容に大きな違いがあった」ということも少なくない。“一体どうすりゃいいんだ”という声も聞こえてきそうだが、何度も言うように、最終確認はやっぱりプロの意見を聞いた方がいい。いずれにしても、生命保険は大なり小なり安定した生活を裏打ちするものであり、その保険料は必要経費とも言えるのである。死亡保障を代表する基本形の代表格である「終身保険」「定期保険」「養老保険」「収入保障保険」の4つを解説することにする。

【終身保険】

終身保険は、保障が一生涯（終身）続き、いつ亡くなったときでも保険金が支払われる。また、加入から一定期間を過ぎて解約すると解約返戻金があり、その額は支払い保険料の合計より多くなることもあり、こ

保険と暮らしの相談センター
“水災への備えは十分ですか?”

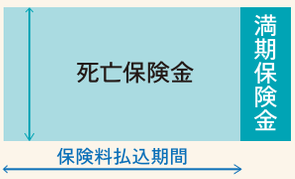
昨年の豪雨災害により被災された皆様に
心よりお見舞い申し上げます。
今回の水害によって、多くの方が建物や自動車に
多大な損害を被りました。
今後に備えるためにも、現在ご加入中の損害保険の
補償内容チェック・見直しが大切です。
弊社では、ご加入中の各種保険の無料診断を
行っていますので、お気軽にご相談ください。

お気軽にご相談ください。
total life support 募集代理店
株式会社
トータルライフサポート
〒010-0916　秋田市泉北3丁目17-22
● 営業時間／9:30～18:00（土・日・祝日は9:30～17:00）
● 定休日／水曜日
TEL 018-827-7611
FAX 018-827-7610
URL http://tls-akita.co.jp
詳細はホームページでもご覧いただけます。

のため、終身保険は、老後資金や教育資金など、長期の資金づくりに使うこともできる。その分、掛け捨ての保険に比べると払い込む保険料は高めになるが、保障切れもなく、貯蓄性もあることから、ある意味取りっぱぐれの無い保険と言えるのかもしれない。

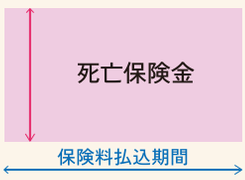
【養老保険】

養老保険は、保険期間が10年、60歳までといったように満期が決まっていて、満期に受け取る保険金（満期保険金）と死亡したときに受け取る保険金（死亡保険金）が同じである。たとえば、10年後に満期保険金100万円、この間に死亡すると死亡保険金100万円が支払われるという仕組みで貯蓄性が高い。名前の如く、養老は老後を養う保険とも言えるが、定期保険特約が付帯されたものも少なくなく、死亡保険金額と満期保険金が異なる場合があるため注意が必要だ。また、金利が高かった時代には、預貯金で貯めるより利回りが良いという理由で人気があり、バブル期時代に加入した契約はお宝保険とも言えるが、今後加入するものにあっては利回りが下がっているため、そのメリットは縮小している。



【定期保険】

一定の期間に限り保障される保険。「10年間」や「60歳まで」のように契約時に定めた保険期間は保障が続き、期間が満了すると保障はなくなる。保険期間中にもしも死亡すれば保険金が支払われるが、支払事由に該当することがなければ、保険料は戻ってこない。このため「掛け捨て型の保険」と言われる。保険金額、性別や年齢などの条件が同じ終身保険に比べると、保険料は低めになるが、更新型の場合では年齢に応じ、更新の度に保険料が上昇する。



【収入保障保険】

万が一の死亡時に、家族への定期的な収入を保障する保険。死亡保険金は「月額10万円」などと一定金額が「60・65歳まで」と年金形式で分割して支払われるのが基本だが、将来的に受取る分も一括して受取ることもできる。定期保険と同じように、保険期間は契約時に定め、期間が満了すると保障はなくなり、掛け捨て型の保険にあたる。定期保険が保険期間中は保険金額が一定なのに対して、収入保障保険は万が一のときに受け取る年金額は一定であるものの、死亡時から保険期間の満了時（または最低保証期間）までに受け取る保険金の総額は、契約から年月が経つにつれて減っていく仕組みになっている。そのため、保険金額やその他の条件が同じ定期保険に比べて保険料が低めになる。

さて、どう使うか

前段では基本的な仕組みを説明したが、ここではそれぞれの保険がどういう目的で利用できるのか、また、どう使い分けるかを考えてみよう。

終身保険	・葬儀費用 ・家族の生活費 ・負債整理 ・教育資金 ・老後資金 ・相続税対策 ・遺産分割
養老保険	・家族の生活費 ・負債整理 ・老後資金
定期保険	・家族の生活費 ・負債整理
収入保障保険	・家族の生活費 ・子どもの教育費 ・負債整理

保険種類と主な目的に関しては表に整理したとおりだが、勿論どれが良いという訳ではなく、それぞれの世帯事情に合わせた使い分け、組み合わせを考えることが重要だ。時々、"良い保険がありましたら紹介してください"と言われることがあるが、良い保険など存在するものではなく、それぞれの環境や必要性で変わるものである。保険選びは、先ずもって目的ありきなのである。

【目的・葬儀費用】

目的を葬儀費用とするならば、基本的に終身保険である。"いつか終わる命"、その時はいつ訪れるか分からない。であれば当然に終身保険でなければならない。そうすることにより、死亡保険金が確実に家族に渡ることになる。では、加入するのはいつが良いのか？答えは、「健康なうち」「保険料が安いうち」の"早めが良い"ということになる。加入年齢と保険料の関係がどうなっているのか、その一例を某保険会社にて保険料の総額を試算してみた結果は次の通りだ。

【前提条件】

〈性別・男性、保険金額・300万円、払込期間・65歳まで〉

20歳加入…約227万円
30歳加入…約238万円
40歳加入…約253万円
50歳加入…約268万円

20歳で300万円の終身保険に加入した場合での保険料累計は約227万円で済むのに対し、50歳で加入した場合の保険料累計は約268万円となる。つまり、早く加入するほど保険料負担は少なくて済むということになり、その差は41万円程にも及ぶ。よく相談に来られるパターンで、60歳を過ぎたころに"せめて葬式代くらいは遺しておきたい"という相談がある。それまで加入していた保険の殆どが終了してしまったというのがそのきっかけのようだが、申し込みはしたものの、健康状態により「謝絶」（保険引き受けが出来ない）となってしまう方も少なくない。近年TVなどで、"持病があっても入りやすい""80歳まで申込めます"という生命保険のCMをよく目にすると思うが、高齢の方が申し込むことを私自身はあまりお勧めしていない。その理由は、「費用対効果」、つまり、支払う保険料に対し保障金額という効果があまり大きくないからだ。70歳の方が「引受基準緩和型」の終身保険300万円の終身払い（一生涯）に加入した場合での月払保険料は2万4744円にもなり、80歳を超えて払う場合の保険料累計は300万円を超えていく。勿論、加入後の早くに保険金を受取る事態になった場合は保険としての効果はあるものの、70歳時点での男性の平均余命の15・56年（85・56歳）まで保険料を支払った場合の保険料累計は、462万200円にもなってしまう。

来月号は

続編として目的別の保険利用を考察する。